

シャンティ

shanti

2008

秋

10月号

ミエン族の村

特集

手を、とりあうこと。

私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。



社団法人 シャンティ国際ボランティア会

プロジェクトの風景

a scene of our project



●この日、工作教室では風車を作っていた。

ラオス 〈子どもの家〉

Children's Home in LAOS

Cover Photo

表紙：タイ・北部に住むミエン族の女性。
[撮影：神崎愛子]

ラオスの首都ヴィエンチャンの中心部にある「子どもの家」。土曜日の朝8時すぎ、門をくぐると子どもたちの歓声が聞こえてきました。

図書室では、子どもたちに大人気の工作教室が開かれ、スタッフのまわりを大勢の子どもたちが囲んでいます。その隣には絵本を読む子どもたちもいます。年少の子どもはラオス語を指で追いつながら声に出して読んでいます。しばらくすると、外で伝統舞踊のクラスが始まりました。「指をそらして」「もつと背筋をのぼして」と言う先生の指導に女の子たちが集中して踊っています。

ほかにも伝統音楽、演劇、絵画、料理、日本語などの活動があり、子どもたちは積極的に参加しています。

1996年に開館したこの施設は、社会教育の場として、文化にふれる機会を子どもたちに提供しています。「楽しみながら学ぶこと」をモットーにした児童館活動は、「子どもの家」をモデルにラオス全国に広がっています。

(ラオス事務所長 川村仁)

SVAの使命

私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。

特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ（平和）な社会の実現をはかります。

道

みち

巻頭言

洞爺湖G8サミットを終えて、 NGOの成果と課題

事務局次長 三宅隆史

7月7～9日、洞爺湖サミットが開催された。当会は、2007年1月に設立された「G8サミットNGOフォーラム」の貧困開発ユニットのリーダーを専務理事（当時）が務めてきたほか、教育協力NGOネットワークの事務局として教育協力の拡充をG8に求める活動を行ってきた。その成果と課題を振り返りたい。

第一の成果は、貧困・開発、環境、平和・人権分野の144もの日本国内のNGOが一堂に結集し、「G8サミットNGOフォーラム」を結成したことである。互いの意見や主張、立場の違いを乗り越え、統一する意思を示すことが最後までできたことは、2000年の沖縄サミット開催時には見られなかったことである。同フォーラムが呼びかけた「たんざくアクション」では、70万人もの市民が色とりどりのたんざくに平和への願いを書き、それらはサミット前に福田首相に手渡された。

第二の成果は、ある程度、市民の声が洞爺湖サミットの成果に反映されたことである。特に保健分野については、「国際保健に関する洞爺湖行動指針」が採択され、これ

までの公約を履行するためのシステムが作られた。教育については、「35の途上国で初等教育の完全普及を2015年までに達成するために必要な年間約1100億円の援助を行うこと」と、「紛争影響国の教育支援を拡充すること」が成果文書に盛り込まれた。さらに日本政府は、国際教育協力連絡協議会を設置し、G8サミットでの教育分野の成果をフォローアップするとしている。

一方でG8サミットによって日本の援助の課題も明らかになった。第一に日本の政府開発援助に占める基礎教育援助額の割合はわずか3%で、他の先進国の平均6%に対して半分しかない。日本の防衛費は4兆8000億円だが、基礎教育に関する海外援助額はわずか330億円だ。第二に、「すべての子どもが2015年までに小学校に通えるようにする」という2000年に国連が定めたミレニアム開発目標を達成するためには、1800万人の教員を新規に訓練し、雇用する必要があるのだが、日本政府の援助は教員の給与を支援していない。このような日本の教育援助の量と質の改善を働きかけることが今後も当会を含む教育分野のNGOの課題だ。

いままでは日本ではNGOによる政策提言は影響力が小さいと考えられてきた。しかし近年、実際に援助の現場で活動を行い、その意義を認識しているNGOの存在価値は、政策決定の上でも高まっていると感じている。SVAとしても今後、ネットワークを通じてキャンペーンや関係機関への働きかけなどの政策提言活動に取り組んでいきたい。

わたしが好きな絵本

my favorite book

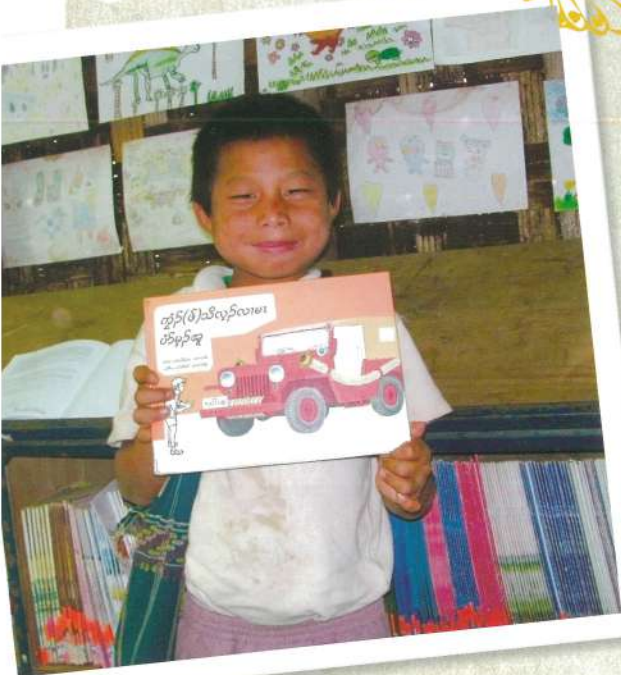
僕の名前はモリチャ。小学2年で8歳です。僕が生まれる前、お父さんとお母さんとお姉ちゃんがいいた難民キャンプがミャンマー政府軍に攻撃されて、3人はウンピナムキャンプへ逃げてきたそうです。だから僕と妹はここで生まれました。

好きな絵本は『しょうぼうじどうしゃ じぶた』。「じぶた」は赤くて、役に立って、かっこいいんです。僕は車に乗ったことがないから、いつか車に乗って、学校や家のまわりだけじゃなくてキャンプ中を走ってみたい。きっと面白いと思います。

好きな遊びはビー玉。最近、雨が多いから外で遊べないけど、遠くからねらって友だちのビー玉に当てたり、くぼみに入れたりした時はうれしい。みんなとワイワイやるのが楽しいです。

将来は、みんな外国に行きたいって言うけれど、僕はここが好きです。家族も友だちもいるし、学校も広場も図書館もあるし。大人になったら「じぶた」のような車を運転したいです。キャンプの中をあちこち車で回ってみるのが僕の夢です。

(インタビュー：ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所長 小野豪大)



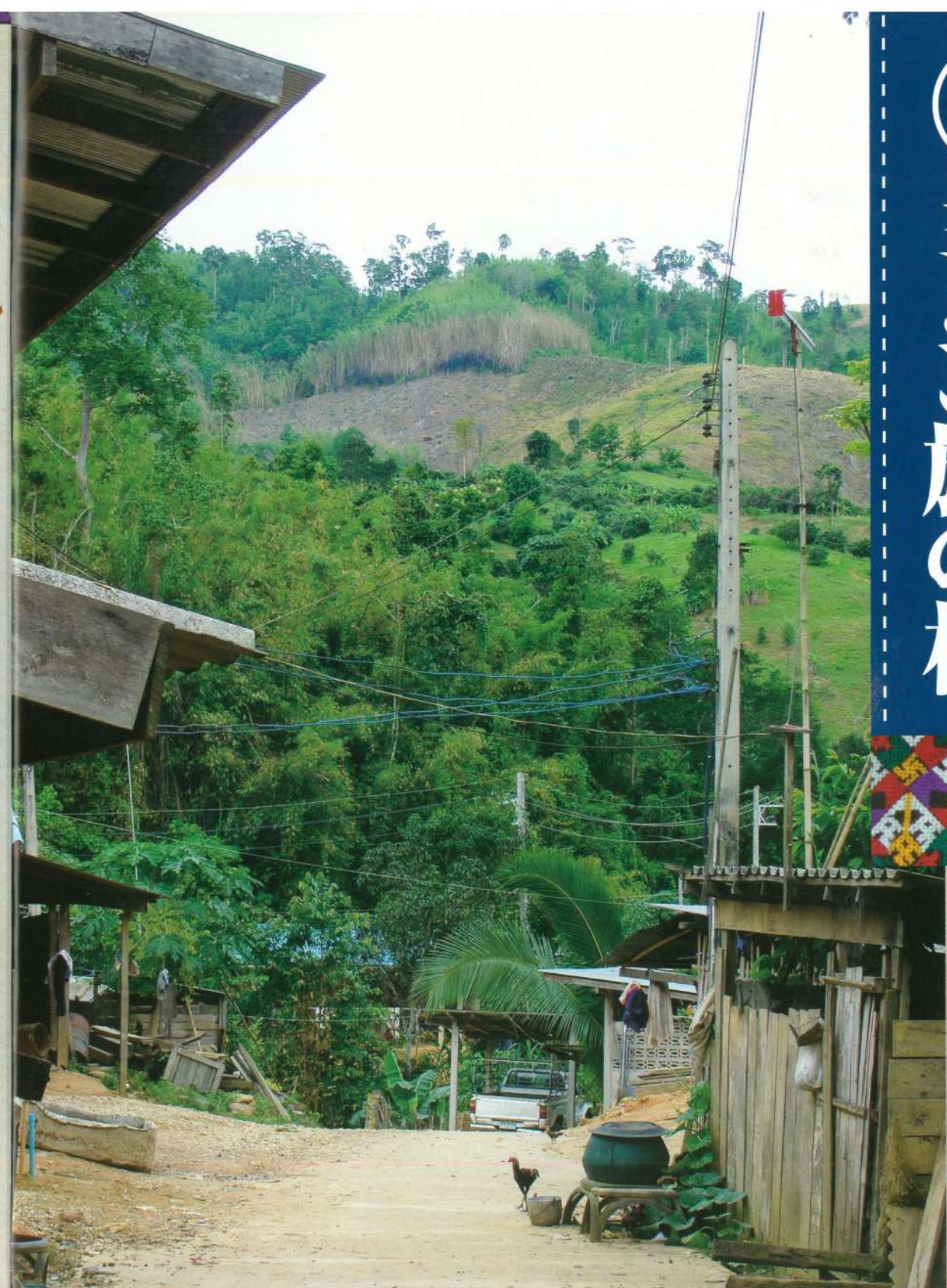
『しょうぼうじどうしゃ じぶた』（福音館書店）を持って

ミエン族の村

クラフト生産者訪問記



手工芸品を通じてアジアの女性たちを支援するクラフト・エイド。毎年、新しい商品を紹介するために、現地の生産者を訪問しています。民族に伝わる伝統、美しい刺繍、あたたかく迎えてくれる人たち。今年6月に訪れたミエン族の村のことをご紹介します。



ミエン族の住む タイ北部へ

成田から飛行機で7時間かけてバンコクに到着した翌日、国内線に乗り1時間20分。ラオス国境沿いに位置するナーン県は、豊かな自然に恵まれ、多くの山岳民族が住んでいます。町の中心も静かで観光客の姿はほとんど見かけません。

ここにTPH（タイ・パヤップ・ハンディクラフト）という現地NGOがあります。クラフト・エイドとの関係も長く、信頼できる団体の一つです。スタッフはデジタルリットさんとジャエさん夫婦、それにリムさんの3名。手工芸部門と教育部門があり、モン族の子どもの学生寮も運営しています。代表のデジタルリットさん自身もモン族で、以前はもつと大きな別のNGOで働いていました。その団体が解散した後、「困っている多くの山岳民族の人たちをそのままにしておけない」とTPHを立ち上げました。

況です。(注1)
合い、刺繍の腕がいいことは村の中でも評価されます。
女性たちは、日差しが強い日中は何人かで木陰に寄り合いながら、夕方からは外に椅子を出して刺繍をします。パターンは頭の中に入っていて、布の目を数えながら糸で模様を描いていきます。よく見ると驚くことに裏面から刺繍しているではありませんか。じっくり見せてもらいましたが、もし私がやってみたらどれくらいの時間がかかるのか想像もできないほど細かな作業。彼女たちは眼鏡ケースの刺繍を2日で1枚仕上げます。

ミエンの女性たち

村では80人の女性たちがクラフトを作っています。同じミエン族のリムさんに通訳してもらい、女性リーダーのマイさんからクラフト作りや村での生活について聞きました。

ミエン族の女性は伝統的に刺繍が得意です。クラフト作りは受注生産で、TPHに注文が入るとスタッフは布と刺繍糸を村の女性に分配します。後日、できあがったら買い取るシステムです。糸の色を変え、ひと針ひと針模様を描き、丁寧に作られる刺繍。ミエンの女性たちは、数百年にわたって代々受け継がれたその技法を、自分の母や祖母から学びました。完成すると互いに作品を見せ

合い、刺繍の腕がいいことは村の中でも評価されます。
女性たちは、日差しが強い日中は何人かで木陰に寄り合いながら、夕方からは外に椅子を出して刺繍をします。パターンは頭の中に入っていて、布の目を数えながら糸で模様を描いていきます。よく見ると驚くことに裏面から刺繍しているではありませんか。じっくり見せてもらいましたが、もし私がやってみたらどれくらいの時間がかかるのか想像もできないほど細かな作業。彼女たちは眼鏡ケースの刺繍を2日で1枚仕上げます。

ミエン族の暮らし



マイさんが村内を案内してくれました。村に唯一ある病院は産婦人科で、彼女はそこで先生の助手をしているそうです。しばらく歩いていくと「おーい、おまえのこの牛が脱走してたぞ」と言われ、慌てて走って行っちゃいました。

山奥の村

ナーン県にはミエン族の村が20カ所あります。デジタルリットさんとリムさんの案内でその一つの村を訪ねました。町から車を走らせること40km。60家族、748人が暮らしています。山深い地域で平地は少なく、どの家庭も農業や町へ出稼ぎに行って生活を支えています。自然環境は豊かで、山では筍や果物、ハーブが自生しており、必要な時に必要な分だけ採りにいきます。斜面の畑ではライチやとうもろこし、水を使わない陸稲を育てています。

私が訪れた6月中旬は、主な換金作物であるライチの収穫は終わっていました。他の果物に比べて高い値段で取り引きされるライチは、村に来る仲買人が以前は1kg35バーツ（約105円）で買い取っていました。しかし、近年栽培する農家が増え、ライチの価値が下がり、現在は8バーツ（約24円）にしかありません。それでもライチの旬は短いので、どんなに安くても売れるしかならないのです。ライチを安く買い叩かれた上に、肥料の購入のために借金をする家も少なくありません。しかも急斜面での農作業は重労働で、農業の収入だけで生活するのは苦しい状

Mien

ミエン族



バッグに使われるミエン族の刺繍



TPHのスタッフと



村にたくさんあるハーブ

(注1) 20年ほど前はケシの栽培も盛んだったが、タイ政府の取り締まりが厳しくなり、唯一の現金収入の道は閉ざされた。

「ワーン！」という歓声の先では、子どもたちが木の枝に輪ゴムを沢山かけて、速くからサングラムを投げ、ゴムを取り合うゲームで盛り上がりつつありました。木陰では、中学生ぐらいの女の子たちが集まって刺繍をしていました。

子どもの教育と女性の自立

タイの山岳民族の女性たちはそれぞれの民族の言葉以外にタイ語も話します。最初、私もタイ語で会話をしようとしたのですが、恥ずかしさやタイ語に自信がないからか、彼女たちはなかなか話してくれませんでした。

その後、私もミエンの民族衣装を着させてもらうことになり、女性たちが4人がかりで手伝ってくれました。年齢的にも私と同じくらい若い女性たち。その時ようやく彼女たちと打ち解けることができました。「出稼ぎに行かなくても家でクラフト作りができるからいいわ。今では子どもの学校だって普通に任せられるのよ」。そう話す女性の顔は刺繍の技術を生かして収入を得ている自信で輝いていました。

山岳民族の人びとは、子どもも家の労働力と考えていて、以前は学校に行かずに農作業や家事を手



おんぶ紐にも刺繍が施されている



仕事の合間に集まって世間話をする



母親の手伝いで刺繍をする女の子



ミエン族の民族衣装

長い布を頭に巻いていきます
 ミエン族の特徴的なマフラー
 丈の長いジャケット
 刺繍に1年もの時間を費やすスポン
 銀さ装飾に用います

(注2) ミエン族やモン族など山岳民族と呼ばれる人たちは、焼畑をしながら数年ごとに土地を移動する生活を数百年にわたって続けてきた。18世紀以降、土地制度の改革が進み、山での暮らしは大層に制限され、現在では平地に移住する人が多い。



裏から刺繍をしている



ミエン族の衣装を着せてもらう



ミエン族の女性たちと(中央がムイさん)

伝っている子どもが大勢いました。現在は、タイ政府の教育政策が浸透し、「学校に行くことや教育は、生きていくために必要」という意識が根付いてきました。学校のある平地に村が移動してきたことにより、女性たちのクラフト生産によって現金収入の機会を得たという点もその大きな要因といえます。タイも中学校までは義務教育ですが、制服や体操着、靴、文具代などのお金がかかります。女性たちが得意とする刺繍の製品を買い取るTPHやSVAのような団体が、子どもたちの教育も支えているのです。

今まで表舞台に出ることがなかった女性たちが、自分の持つ力(刺繍の技術)を生かすことにより自信を持つようになりました。

女性たちが経済的に力をつけることは、精神的な自立にもつながり、家庭内でも収入がある妻に対して夫の接し方も変化してきています。

変わりゆく文化

それぞれの山岳民族には美しい民族衣装があります。ミエンの女性の場合は、自分のスポンに1年もの時間をかけて丁寧に刺繍を施すことで知られています。今はそのような衣装はお祭りや行事の時に身に着けるだけで、普段は大切に箱の中に入れられています。年配の方は民族衣装の一部分を日常的につけていますが、若い人たちは動きやすいTシャツやパンツで過ごしていました。

また、刺繍の模様には受け継が



ミエン族の刺繍のスリッパ

れてきた伝統的な意味(注3)があります。「この模様はどんな意味をもっているの？」と尋ねると、一人の女性が「きれいだから作ったの。意味はないわ」と答えました。彼女たちの美しい民族衣装や刺繍は、毎日の生活の中で姿、形を変えてきています。

ムイさんに「結婚する時はミエン族同士でするの？」と聞くと、「昔はそうだったけど、今は厳密ではなくて、好きな人と結婚するのよ」という答えも意外でした。話を聞くほど、民族に伝わる文化やその特徴が継承されなくなっている現状を知り、複雑な気持ちになりました。

同じような状況は、他の民族の人たちからも聞きました。カレン族の女性は、未婚者は白いワンピース、既婚者は赤いワンピースを着るのが慣わしでしたが、最近では衣装を見て判断することが難しくなってきました。また町で暮らすモン族の女性は、「自分の子どもは刺繍することに興味がないし、刺繍はできないわ」と話していました。

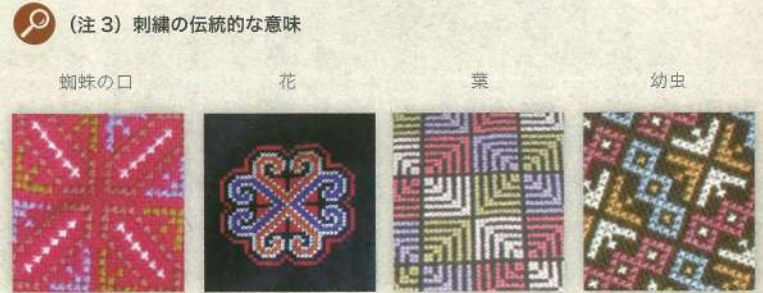
何百年にわたって独特の文化を受け継いできた山岳民族の暮らしは、今大きく変容しています。テレビに映し出される都市に憧れて出稼ぎに行く人も増えています。若い世代は時間がかかる地道な作

業を嫌い、クラフト作りの後継者不足も深刻です。でも、ミエン族の将来を決めるのは彼ら自身。素晴らしい刺繍が女性たちの宝として受け継がれていくように、村から帰る車の中で私はそんなことを考えていました。

クラフト・エイドができること

私たちが山岳民族の人たちを支援する目的は、女性たちの力を高めることと収入向上の他に、伝統技術の生かされた素晴らしいクラフトとその文化を後世に遺したいということがあります。その価値を認めクラフトを注文し、積極的に関わることで、その技法や美しい模様も受け継がれていきます。そして安定した収入が得られることで、次世代に継承されていくための力添えができればと思っています。

「伝統文化を次世代にどう伝えていくか」という課題は、私たち日本人にも当てはまることかもしれません。山岳民族の現状を通して、文化を伝えていくことの意味を改めて考えていきたいと思っています。



(注3) 刺繍の伝統的な意味



文・写真・イラスト
 神崎愛子(かんざき あいこ)
 岐阜県出身。大学で社会福祉を専攻。児童養護施設で勤務した後、JVCインターンシップに参加しタイの女性織物グループに関わる。2003年からSVAクラフト・エイドで勤務。

緊急救援の現場から



上：被災した村（2カ月後）
下右：絵本を読む被災者
下中：支援物資（米、野菜、油、数珠、薬）
下左：現地で活動中の白鳥孝太



ミャンマー

サイクロン被災者支援

**みんなが
生きるために
助け合った**

死者・不明者約13万8千人、被災者約735万人。——今年5月、ミャンマー（ビルマ）南部を襲ったサイクロンは、未曾有の大災害となった。人びとがこの状況を乗り越えられるのだろうか——当初、被災地の詳しい状況はわからなかった。まもなくSVAは独自のルートから情報を得て、支援活動を開始した。

サイクロン発生から2カ月近く経ってから、ようやくビザが下り、首都ヤンゴンに入ることができた。その時、被災直後の状況を聞くことができた。

エヤワデイ川河口のデルタ地帯では、村から村への移動に小舟が欠かせない。しかしサイクロン直後、人も家畜も、家も舟もが流され、村人たちは文字通りの孤島に取り残された。かろうじて生き残った人びとは、行方が知れない家族を案じながらも厳しい状況下を生き抜いた。飲み水は雨水や泥水、芋や豆などのわずかな食料を村の中で分け合い、生きるため耐えに耐えた。寺や教会には多くの人びとが身を寄せ、互いに助け合った。過酷な避難生活を1カ月ほど続けるうち、ようやく遠方からの救援の手が届き始めたという。この間に栄養不足や不衛生な生活で病気になる、医療処置が間に合わず亡くなった方々も多い。特にお年寄りや子どもなど体力の

ない人から犠牲となっていた。この厳しい環境を生き延びた人々に対面した時、私に感嘆の気持ちがおこみあげてきた。もともと、川辺の自然に寄り添いながら、稲作や漁業を糧に質素な暮らしを営んできた人びとだ。その精神と肉体の強さを感じるとともに、便利な生活に慣れてしまった私たち日本人であればとても耐えきれなかったのでは、と感じた。

日本のような「災害ボランティアセンター」や「相互援助協定」などのしくみがなくても、ミャンマーの被災地では「互いに助け合う」ことが自然に行われていた。この地域はビルマ族、カレン族、モン族などが混在し、仏教やキリスト教、イスラム教など信仰する宗教も様々な人びとが、救援物資を互いに譲り合いながら、避難生活を共にした。

そして、被災地から遠く離れた都会ヤンゴンに暮らす若者の中からも、救援活動に加わる人が出てきた。「困った人に手をさしのべる事は『徳を積む』ことになる」という仏教の教えがミャンマーの若者たちの心の中にある。今、自分が生きていく社会の中で「徳」を積むことは、親のため、そして自分のためになるという。その気持ちが若者たちをボランティア活動へと導いていた。

被災地で彼らと共に行動しながら、ミャンマーの若者の情熱と素直な心に感動した。この国の若者は自分たちの国の将来について、互いに意見をぶつけ熱く語り合う。その純粋で前向きな姿をうらやましいと感じる自分がいた。（緊急救援担当 白鳥孝太）

バングラデシュ

サイクロン被災者支援

**自然と共に
生きるために
防災への取り組み**

「またサイクロンがくるんだ！今度はナルギスって名前らしい」。車のラジオをつけたドライバーが教えてくれた。昨年11月に巨大サイクロン「シドル」がバングラデシュ南部を襲ったから約半年。私は支援活動のため現地に行った。折しもサイクロンが発生しやすい乾季と雨季の境目に突入り、それから数日はどこへ行っても「ナルギス」の話題で持ちきりだった。ベンガル湾上に発生したサイクロンは、少しずつ大きくなってバングラデシュ南部へ向かっている。集会所やサイクロン・シェルターはまだ建設途中で、今サイクロンが来たら台無しになる可能性もある。そしてスタッフや住民の安全をどう確保するか、首都ダッカへ9時間かけて車で戻る明日の計画をどうするか、サイクロンが来る前に判断しなければならぬ。

そんな時、過去のサイクロンで幾度も住む家を失い、その都度再建をしてきた80代の男性の言葉を思い出した。「ここでは川がなければ魚も獲れず生活できない。そうすると洪水やサイクロンも人生の一部みたいなものだ」。この地域でのサイクロンの襲来は日常の一部でもある。私は落ち着きを取り戻し、現地スタッフと相談し

ながら、一つひとつの対応を決めていった。かつて1991年に、バングラデシュではサイクロンによって約14万人が亡くなった。それ以降、政府はサイクロン・シェルターの建設を進め、各地域で防災無線を取り入れて災害情報の伝達網を整備した。住民たちも主体的にサイクロンに対する備えに取り組んでいる。村の人たちは防災について学び、自然災害は脅威ではあっても、いざという時にどうすれば被害を最小限に食い止めることができるかを認識している。適切な距離に住民の数に見合うサイクロン・シェルターを作ることやサイクロンの正確な情報を迅速に得ること、一人ひとりが過信せずにサイクロンが来た時に避難することが重要だ。特に身近な人を失った住民は、住民同士が助け合うことで「救える命」があったことを痛感し、それを防災の行動につなげている。

建設途中の集会所に行くことと建設委員の一人でもある高校の先生が、「今日はこんな状況だから生徒たちを早めに下校させたよ。集会所が完成したら、防災教育も重点的にやりたいんだ」と言っていた。

川がいくんだ標高の低いデルタ地帯が多くを占める地理的な条件と地球温暖化の影響で、サイクロンや洪水などの自然災害と日々向き合うバングラデシュ。地震が多く、地域での防災にどう取り組むかが課題の日本にとって、見習うべきところは多い。



上：サイクロンシェルター建設のための話し合い（中央が木村万里子）

左上：この川の河口に被災地はある
左中：子どもたちに教科書と文具を配布した
左下：サイクロンで崩壊した集会所



（緊急救援担当 木村万里子）

Thailand | タイ



子どもの気持ちになって新聞をちぎって遊ぶ
(撮影：瀬戸正夫)

子どもと一緒に
楽しんで

5月21〜25日、バンコクで「子どもの育ちと遊び、そして絵本」のワークショップを実施しました。参加したのは、SVAタイランドのスタッフや関係者、一般の保育関係者など102名。日本から赴いた4人の講師が、日本の保育制度や子育ての現状を話し、その後は廃品を利用してのおもちゃ作り、絵本の楽しさを知るワークショップと続きました。

講師陣からの一貫したメッセージは「子どもになってみて下さい」でした。「子どもの学びや気づきは楽しむことから始まり、そして楽しむことが大切。だから、人も本気で楽しむことが大切です。だから、今日は心から楽しんで遊んでください。まだ字の読めない子どもになって絵本の絵を「読んでください」と子どもの気持ちになることが強調されました。

これを受けて参加者は、新聞をビリビリにちぎったり、紙パックを再利用して作ったメガネをかけてみたり、絵本をじーっと見つめるなど、子どもになりきって体験。無邪気にはしゃいで楽しむ様子が見られました。一般参加者のみならずSVAのスタッフにとってもスキルアップの機会となりました。ベテランの一人が「絵本ってこんなに楽しいと思わなかった」と感想をもらしたほどです。子どもに関わる私たち大人が子どもから学ぶ姿勢を再確認する研修会となりました。

この研修は大阪マイペンライの協力により実施されました。
(SVAタイランド 松尾久美)

Cambodia | カンボジア



奥地の学校では初めて絵本を手にする子どもも多い

新しい移動図書館車が走る

6月18日、日本基幹産業労働組合連合会の支援によりカンボジアに新しい移動図書館車が届けられました。これまでの移動図書館車は主にプノンペン市内のスラムを回っていましたが、新しい移動図書館車は主に学校建設を行う田舎の学校を巡回します。

カンボジア事務所では、これまでも子どもが絵本を手にする機会を増やそうと、学校建設事業のスタッフが学校を訪問する際にも車に絵本を積んでいました。スタッフ

が建設の技術指導を行っている間が、子どもたちの読書の時間です。学校の設備が満足しない奥地の村には、絵本もありません。スタッフが準備をする時間ももたかしく、好きな絵本を手にとりて木陰で読む子どもたち。生まれて初めて目にする色とりどりの絵本を夢中になって読んでいます。絵本だけでなく大人用の図書も用意してあり、保護者や先生、地域の人もSVAのスタッフが訪問するのを楽しみにしています。これまでは布製の本入れと図書箱をト

(カンボジア事務所 鈴木淳子)

Laos | ラオス



新しい事務所の図書スペース。スタッフが絵本の読み聞かせや紙芝居もしている

事務所の引越しと
子どもたちの夏休み

7月中旬、ラオス事務所は家賃の値上げをきっかけに、3kmほど郊外に離れた建物に引越しました。以前の事務所は1階に図書室があり、子どもたちがよく絵本を読みに来ていました。しかし、新事務所は街外れの住宅街で、なおかつ図書室にするための部屋がなく、近所の学校の先生や図書館員のために1階の小さなスペースに本を並べただけの図書コーナーを作りました。引越してから半月たった頃、看板もなにも出していないのに、新事務所の狭い一角は本を

楽しむ子どもたちであふれていました。ところで、ラオスの学校の夏休みは6月から8月末まで。長い休みの間、子どもたちの過ごし方は様々です。外で走り回って遊ぶ子どもたちも大勢いますが、最近の子どもが一日中テレビを見ている、携帯電話のメールに夢中になっている、という親の嘆きも聞かれます。また都市部では少しずつ商業施設が増え、ゲームセンターに入出入りする子がいったり、ゴミ箱から空き缶など換金できるものを集めて小遣いを稼いだり

する子もいます。一方、地方の農村では雨季のこの時期、田植えの手伝いをして子どもをよく見かけます。ラオスの子どもはよく家のお手伝いをします。日本の学校のようなクラブ活動のないラオスでは、子どもたちが長期休暇や放課後を充実させて過ごせる場所が少ないのです。図書コーナーは子どもが安全に楽しく過ごせる貴重な場所になっています。

(ラオス事務所 鈴木淳子)

Myanmar (Burma) | ミャンマー (ビルマ) 難民
Refugees



作った絵本を披露する母親。「字は読めないけど、子どもにはおはなしをしてあげたい」

絵本を通じた
親子のふれあいを

7月から各難民キャンプで、乳幼児の親を対象にした絵本研修会が始まりました。この研修会は昨年初めて開き、参加者の多くは字が読めないため図書館の利用が少なかったとわかりました。そこで今回は手作りの絵本を用いての読み聞かせを中心に行いました。

参加者もありません。中には母親に混じって父親

とを知ってよかった。これから利用したい」との声が聞かれ、研修後たくさん親が利用者登録を行っていました。しかし、図書館は字が読めない親にとつては敷居が高いようです。今後、誰でも利用できる図書館づくりを目指して、工夫が必要。まずは、研修で作った絵本が親子たちによって子どもに読まれることを願っています。

(ミャンマー難民事務所 加藤美生)

Afghanistan | アフガニスタン



新しい机と椅子で勉強する女子学生

子どもたちに
机と椅子が届きました

SVAが学校建設事業を開始した2003年頃は、ナンガハール州の多くの地域で帰還した難民が急増し、学校も飽和状態でした。当時は少しでも多くの子どもたちが勉強できるように、教室の床にカーペットを敷き、その上で授業を行っていました。あれから5年が経ち、帰還難民による人口増加は落ち着きました。そのため今年度は外務省のNGO向け資金により、SVAの支援対象校15校へ児童の机と椅子の配布を行いました。人数の変動に対応できるよ

うにした長机と長椅子は、できあがるまで何度もデザインを確認し、子どもたちが使いやすいよう工夫を凝らしました。ある村の先生は、「校舎や図書室ができ、子どもたちの机と椅子も届けてくれた。時間をかけて学校のために協力してくれるSVAに感謝している」と喜びを述べてくださいました。初めて机と椅子で勉強する女子生徒は、「学校の設備が少しずつ整ってうれしい。一生懸命勉強して将来は社会の役に立てるようにしたい」と話しました。

アフガニスタンの就学率が50〜60%と伸びている中で、女子の就学率は3分の1程度といわれています。地方における女子教育の課題としては、校舎の不足以外に女子教員が少ないことがあります。女性の場合、地域の出身者以外が教員として学校で働くことは難しく、その地域出身の女性教員の養成が必要です。そういった意味でも、都市部だけでなく、地方にも女子教育の機会を広げていくことが重要だといえます。

(アフガニスタン事務所長代行 山本英里)



上：8月6日大分県中津市の善隆寺で行われたチャリティ寄席

下：大乗寺でのクラフト販売（左が大宮）

お坊さんと一緒に
こんな活動をしています！



参加した議員の皆さんとスタッフ（前から2列目、中央が渡辺恵司さん）

「議員の集い」を
東京で開催
代議員 渡辺恵司

SVAの特色の一つは、多くの寺院関係の皆様が応援してくださっていることです。その活動の一端をご紹介します。

金沢にて 今年は曹洞宗大乗寺のご開山、徹通義介禪師、七百回御遠忌の年。初夏より秋にかけて、金沢市内の山内では、様々な催しが行われています。7月5日と6日には「蓮華の宴」が催され、お香の会、尺八演奏会、室内楽の夕べ、参禅会その他、陶芸、油絵、写真の展示なども行われました。当会も大乗寺のご好意により参加させていただき、パンフレットの配布、オープニングでの活動紹介、本堂の一角でのクラフト販売などを行いました。「こういう団体があつたんですね」「ミャンマーへの義援金をSVAに託したいです」など、あたたかい声をかけていただき、金沢の皆さんに当会の活動

を知っていただくよい機会となりました。

チャリティ寄席 SVAの関係寺院において、今、大好評の企画です。社団法人落語芸術協会と提携して一昨年よりスタートしたもので、お寺を会場として落語会を開催し、木戸銭代わりの募金でアジアの子どもたちを支援していただくというものです。「地方にいと落語に接する機会がないのでみんな喜んでいま

集い 来る10月7日、鎌倉の建長寺（臨済宗）を会場として、第1回「SVA国際ボランティアの寺の集い」が開催されることになりました。「SVA国際ボランティアの寺」と

は、SVAと共に国際協力に取り組む、宗派を越えた仏教寺院のネットワークです。「参加寺院同士の交流がしたい」との要望にお応えして、第1部は「チャリティ寄席」、第2部は「参加寺院の交流会」を開催します。第1部はどなたでも参加できますので、鎌倉観光がてら、ぜひお越しください。（詳しくは同封のチラシをご覧ください。）

こうして全国の寺院と協働しながら活動させていただいている私たちが、これからも一歩一歩、地道に顔の見える関係づくりを進めてまいります。と思っています。

（宗教部門担当 大菅俊幸）

6月22日、「議員の集い」がSVA東京事務所で開催され、私も発起人の一人として参加しました。私にはかねがねSVAの代議員として何をすべきかを考え、またそのことをほかの代議員や事務局のスタッフと話し合ってみたくて考えていたのですが、そんな折、昨年末の代議員会で10月に九州で行われた「第1回SVA代議員の集い」の報告がありました。代議員のほとんどが同じ思いであることを知り、私はその場で「代議員の集いを継続していきましよう」と提案し、多くの賛同を得たのです。

その中で、「代議員は会員の代表であり、またそれぞれが国際協力に関わった活動をしている。その基盤を生かしSVAに協力していくようにしたい」、「それぞれの地域でイベントをしてはどうか」、「地域ごとに会員の集いや交流をしたい」、「学校の総合的学習にSVAと協力して出前授業ができれば」など、多くの具体的な意見がでたのです。最後に、今度も「代議員の集い」を開催することと、今年12月の代議員会に向けて「代議員宣言」を起草することを決議し、有意義なうちに閉会しました。全国の会員と代議員の皆さん、地球上の困難な状況にある人々と世界に羽ばたく日本の子どもたちの夢を育てるために、一緒に話し合い、活動していきましよう。

（森を再生させる会代表 東京在住）

TOPICS

日本各地での
活動やニュースを
ご紹介します。

「大切なのは、人と人の絆です」

7月27日、広島県呉市の神応院で「アジア祭り」が行われました。今回で15回目となるこの催しは、アジアの子どもたちを取り巻く環境について知ってもらうもの。大人30名と子ども5名が参加しました。最初に、国内事業課長の鎌倉が「地球家族」というワークショップを行いました。様々な国の家族の生活を写した写真を見た参加者は、「持ち物の多さと幸せかどうかは別ですね」「人間に大切なのは、やっぱり人と人との絆です」と感想を話していました。その後、絵本の訳文貼り、太神楽の曲芸が披露され、和やかなひと時となりました。



1人1冊、絵本の訳文貼りを完成させました

小杉太一さん、中学校でSVAの活動を紹介

静岡県浜松市の会員、小杉太一さん（72歳）は、7月に市内の中学校など4カ所で行ったラオスの子どもたちの状況やSVAの活動について話しました。そのうち丸塚中学校では中学生28名が参加。はじめにSVAの活動紹介ビデオを見てもらい、過去4回訪問したラオスの話をすると、生徒たちは真剣な眼差しで聞いていました。参加した生徒にとっては、普段感じない日本の「豊かさ」や「物のありがたさ」に気づき、自分の生活を見直すきっかけにもなっているようです。小杉さんは、「これも生き甲斐の一つ。頼まれればどこへでも喜んで出かけます」と子どもたちとの交流を楽しみにこの活動を続けています。



小杉太一さん（スタディツアーでラオスを訪問して）

「私にとってのシャンティな世界」

7月3日午後、SVAの理事とスタッフの協働をすすめるためのワークショップを開きました。前半のテーマはSVAの理念と使命の共有。「私にとってのシャンティな社会」と「その実現のために明日から私がすること」を、小グループに分かれて話し合い、紙に書いて発表しました。後半は、2011年に迎えるSVAの30周年記念事業の具体的なアイデアを出し合いました。進行の永堀宏美さんは参加型学習の専門家。ゲームを取り入れた楽しい雰囲気なかで、理事とスタッフ一人ひとりの距離もより身近に感じられました。



30周年にむけて
たくさんアイデアが出ました

カンボジア政府が、八木沢克昌に勲章を授与

6月17日、アジア地域ディレクターの八木沢克昌が、カンボジア政府よりタバダン（上級勲爵士）の勲章を授与されました。これは外国人が授賞できる勲章のなかでは最も位が高く、カンボジアの発展、平和に特に功績があったと認められた者に与えられるものです。授章式は、タイ国境に近いバタンバン州の中学校開校式典の中で執り行われ、ヘンサムリン国民議会議長が臨席し、1万1000人が集まりました。八木沢は「1991年からカンボジア国内での活動を行ってきたSVAの活動そのものへの評価でもあり、何より、その活動を支えてくださったご支援者の皆さまのご尽力の賜物」と受けとめています。



ヘンサムリン氏と八木沢克昌（右）

井植記念「アジア太平洋文化賞」を受賞

SVAは、アジア太平洋フォーラム・淡路会議が主催する、第7回井植記念「アジア太平洋文化賞」を受賞しました。この賞は、アジア太平洋地域における文化的・社会的な実践活動を通じて、国際交流や地域発展に顕著な貢献をした団体に贈られるもので、500万円が授与されます。SVAの取り組みに対して高い評価をいただいた喜びを皆さまと分かち合い、ご支援いただいた皆さまに心から感謝いたします。



上：カンボジアの田園
下：通勤手段は自乗車



上：図書館事業課のスタッフと
下：紙芝居の読み聞かせ

カンボジア事務所がある首都
プノンペンと、図書館事業
課の活動するシエムリアップ州を
車で6時間かけて往復する日々で
す。カンボジアに来て1年半。お
気に入りの場所や友人もできまし
た。「負」の歴史を取り上げられ
ることの多いカンボジアですが、
一番の魅力は広い空と「ほほえみ
の国」と呼ばれるような人々の笑
顔だと感じています。

7時30分 始業

ラッシュで混雑する道を慎重に進
みます。

朝のミーティング。司会を担当
するスタッフの「チョムリアップ
スオー（おはようございます）」で1
日が始まります。予定や連絡事項
を10分程度で共有し、それぞれ自
分の席へ。私の担当は、図書館事
業と訪問者の受け入れです。地方
へ出張するときは、朝7時にプノ
ンペンを出発。学校では先生と話
をしたり、図書室の様子を見たり、
子どもたちに絵本の感想を聞いた
りと、あつという間に午前中が終
わります。

17時30分 終業

野菜も果物も豊富で、日本
と同じ食材が入ります。時間
のない時は、近所の安い食堂で緬
類(約150円)を食べることが多いです。

カンボジアの食事は、日本には
ないヤギ鍋、アリの炒め物、カエ
ルなど驚くものも多いですが、何
でも食べてみる私には楽しみな時
間です。また今年4月のクメール
正月は、カンボジアの海辺で過ご
しました。美しいビーチ、色とり
どりの魚、真っ赤な夕陽を眺めな
がら、また一つカンボジアの良さ
を発見しました。

隣家の鶏の声で起床。3階の私
の部屋は大家さんの家とベランダ
でつながっています。大家さんの
高校生の娘、ソペアックちゃん
簡単にストレッチ。目が覚めたと
ころでフルーツジュースとパンで
朝食を取ります。昔フランス領だっ
たのでパンは安くておいしく、カ
ンボジア人も大好きです。事務所
までは自転車10分の距離。通勤

6時 起床

隣家の鶏の声で起床。3階の私
の部屋は大家さんの家とベランダ
でつながっています。大家さんの
高校生の娘、ソペアックちゃん
簡単にストレッチ。目が覚めたと
ころでフルーツジュースとパンで
朝食を取ります。昔フランス領だっ
たのでパンは安くておいしく、カ
ンボジア人も大好きです。事務所
までは自転車10分の距離。通勤

11時30分 お昼休み

カンボジア事務所のお昼休みは
11時30分から14時。ほとんどのス
タッフが自宅に戻って食事をし、
休憩を取ります。私は市場で買い
ものをし、家で簡単な昼食を作り

陽が完全に傾く前に帰路につ
きます。夕食は、プノンペンに
いる他のNGOのスタッフと食
べることが多く、地方に出張中はス
タッフみんなで食べます。最近の
話題は、カンボジアの下院選の結
果、アープ（おぼけ）は本当にい
るか、新しいお店の情報など。
話は尽きません。家にいる時はク
メール語の勉強や読書をして過ご

内戦を経験したからこそ「カン
ボジアの子どもたちのために」と
日々奮闘するスタッフと共に、時
には笑い、時には涙しながら、で
こぼこ道を進み、日本の皆さんの
想いを絵本と一緒に子どもたちへ
届けています。

隣家の鶏の声で起床。3階の私
の部屋は大家さんの家とベランダ
でつながっています。大家さんの
高校生の娘、ソペアックちゃん
簡単にストレッチ。目が覚めたと
ころでフルーツジュースとパンで
朝食を取ります。昔フランス領だっ
たのでパンは安くておいしく、カ
ンボジア人も大好きです。事務所
までは自転車10分の距離。通勤

陽が完全に傾く前に帰路につ
きます。夕食は、プノンペンに
いる他のNGOのスタッフと食
べることが多く、地方に出張中はス
タッフみんなで食べます。最近の
話題は、カンボジアの下院選の結
果、アープ（おぼけ）は本当にい
るか、新しいお店の情報など。
話は尽きません。家にいる時はク
メール語の勉強や読書をして過ご

内戦を経験したからこそ「カン
ボジアの子どもたちのために」と
日々奮闘するスタッフと共に、時
には笑い、時には涙しながら、で
こぼこ道を進み、日本の皆さんの
想いを絵本と一緒に子どもたちへ
届けています。

内戦を経験したからこそ「カン
ボジアの子どもたちのために」と
日々奮闘するスタッフと共に、時
には笑い、時には涙しながら、で
こぼこ道を進み、日本の皆さんの
想いを絵本と一緒に子どもたちへ
届けています。

文・写真：
鈴木晶子（すずき・あきこ）

岐阜県出身。2005年1月SVA入職。
緊急救援担当として三宅島、インドネシア、
パキスタンなどの災害地へ飛ぶ2年間を
経て、2007年3月よりカンボジア事務
所図書館担当。スタッフから「アキコッ
と呼ばれる。趣味は週末の市場巡り。



総務スタッフのソペアビー（右）と



プノンペンの市場にならぶ果物



上：図書館事業課のスタッフと
下：紙芝居の読み聞かせ

Shanti

ボランティア な人たち

No. 43
阿部真智子
Machiko Abe

「感動」とは、
心が動くこと



三菱商事株式会社で社会貢献を担当
している阿部真智子さんは、今春より、
「ボランティア活動に参加し、ラオスに図
書館を届けよう」という取り組みを社内
スタートさせた。社員がボランティアに
加する毎に1ポイントが加算され、5ポ
イントためた社員が4人集まると、会社
が図書支援。4人の名前と会社名が記
された木製の図書箱に、絵本がぎっし
り詰められて、ラオスの子どもたち
の手に届く。社員がボランティアを通
じて何かを感じて何かを得る、そして
同時にラオスの子どもたちの支

「ボランティア活動に参加し、ラオスに図
書館を届けよう」という取り組みを社内
スタートさせた。社員がボランティアに
加する毎に1ポイントが加算され、5ポ
イントためた社員が4人集まると、会社
が図書支援。4人の名前と会社名が記
された木製の図書箱に、絵本がぎっし
り詰められて、ラオスの子どもたち
の手に届く。社員がボランティアを通
じて何かを感じて何かを得る、そして
同時にラオスの子どもたちの支

「ボランティア活動に参加し、ラオスに図
書館を届けよう」という取り組みを社内
スタートさせた。社員がボランティアに
加する毎に1ポイントが加算され、5ポ
イントためた社員が4人集まると、会社
が図書支援。4人の名前と会社名が記
された木製の図書箱に、絵本がぎっし
り詰められて、ラオスの子どもたち
の手に届く。社員がボランティアを通
じて何かを感じて何かを得る、そして
同時にラオスの子どもたちの支

「ボランティア活動に参加し、ラオスに図
書館を届けよう」という取り組みを社内
スタートさせた。社員がボランティアに
加する毎に1ポイントが加算され、5ポ
イントためた社員が4人集まると、会社
が図書支援。4人の名前と会社名が記
された木製の図書箱に、絵本がぎっし
り詰められて、ラオスの子どもたち
の手に届く。社員がボランティアを通
じて何かを感じて何かを得る、そして
同時にラオスの子どもたちの支

本の紹介



『子どもたちに寄り添う
カンボジア—薬物・HIV・人身売買との闘い』
(JULA 出版局)
文・工藤律子 写真・藤田有史
定価 735 円

工藤律子氏は、ラテンアメリカを中心に、
世界の子どもたちの問題を20年近く取材し続け
ているジャーナリストです。特にストリート
チルドレンの問題に関わり、この問題は世
界中が本腰を入れて取り組むべきだと考え、
文筆業のかたわら、NGO「ストリートチ
ルドレンを考える会」の共同代表を務め、様々
な情報発信を行っています。
写真の藤田有史氏は、当会の広報誌の写
真を担当したこともあります。

本書は、工藤氏が「取材した中で最も状
態の悪い国の一つ」と感じたカンボジアの子
どもたちに関するレポートです。貧富の「格
差」が問題視される昨今のカンボジアにお
いて、人身売買、薬物依存、HIV感染など
へと巻き込まれていく貧困家庭の子どもたち
を支援する大人たちの姿が心に深く響きます。
末尾ではSVAの活動のことも紹介されて
います。カンボジアの子どもたちが置かれて
いる現状を考える上でおすすめの一冊です。

i 緊急救援活動へのご支援
ありがとうございます

バングラデシュおよびミャンマー（ビルマ）のサイクロン被災者支援にたくさんのご協力をいただいています。2008年7月末現在で、バングラデシュには3539万円、ミャンマーには3406万円の募金が寄せられました。

バングラデシュで建設しているサイクロン・シェルター4棟は、今年11月末の完成を予定しています。またミャンマーでは、緊急支援物資の配布のほか、あらたに被災地域の子どものための支援として孤児院の建設と集会施設の再建を来年4月末をめどに進めています。

皆さまからお預かりした浄財は、形を変えて被災地に届き、復興を応援する力になっています。募金の呼びかけに応えてくださった多くの方々に感謝いたします。

担当◎緊急救援担当 木村万里子・白鳥孝太

i 2008年度「絵本を届ける運動」経過報告

今年は皆さまのおかげで、とても順調に絵本が集まっています。夏休みに友だちと、ご家族と、職場の仲間の皆さんと、絵本作りをされた方も多いのではないのでしょうか。

7月末現在の絵本の申込冊数 13,315冊

目標の17,000冊まであと少し。引き続き皆さまのご協力をお待ちしています。

担当◎国内事業課 林飛鳥・服部貴子

i 会員のご継続をお願いします

会員の皆さまの会費の期限が、同封の振込用紙に記載されていることにお気づきでしょうか？

会費はSVAの活動を支える大切なお金です。期限がもうすぐという方、過ぎてしまったという方は、ぜひご継続をお願いします。なお毎月1000円から口座振替もご利用いただけます。詳細はお問い合わせください。

担当◎国内事業課 佐藤宣子・清野陽子

i 人事

<異動> **服部貴子** チャイルド・ブック・サポーター担当
から絵本を届ける運動担当へ（7月1日付）

清野陽子 絵本を届ける運動担当から
チャイルド・ブック・サポーター担当へ
（7月1日付）

代議員会、SVAの日のつどい

「2008年度通常代議員会」を下記の日程で開催します。会員の代表として代議員の皆さまに、2009年度の事業計画案と予算案を審議いただきます。代議員の方には後日ご案内と資料をお送りいたします。

代議員会終了後、「SVAの日のつどい」を予定しています。1981年12月10日にSVAの設立総会を開催したことになんで12月10日を「SVAの日」とし、「つどい」では、先達を偲び、継続20年を迎える永年会員の顕彰、講演会などを行います。会員の皆さまもぜひご参加ください。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

日時： 2008年12月13日（土）
代議員会 13：30～16：30
SVAの日のつどい 17：00～18：30
懇親会 18：30～19：45

場所： 同封のチラシに記載しています

会員の皆さまの交流の機会として、多くのご参加をお待ちしています。

担当◎経理・総務課 市川幸・河口尚子

会員&サポーター交流イベント
「小さな絵本の大きなチカラin 名古屋」

SVAの図書館活動や現地の様子をお話させていただきます。会員、チャイルド・ブック・サポーターの交流の場として、またご意見をうかがう機会になるようにと考えています。どうぞふるってご参加ください。

日時： 2008年10月4日（土）14：00～16：00
場所： 名古屋国際センター（4階・第3研修室）
名古屋市中村区那古野1-47-1
（名古屋駅から東へ徒歩7分）

参加費： 無料（定員50名）

お申込： 10月2日までに、SVAの担当者までご連絡ください。お会いできるのを楽しみにしています。

担当◎国内事業課 佐藤宣子・清野陽子

ニュースレター読者の皆さまへ

「シャンティ」は、リニューアルして1年経ちました。会員の皆さまからの感想を楽しみに、特集の企画や製作に取り組んでいます。ぜひ皆さまのご感想、ご意見をお寄せください。短くてもうれしいです。次号冬号は「アフガニスタン特集」を予定しています。発送は年末です。 担当◎国内事業課 村田泉

社団法人
シャンティ国際ボランティア会

〒160-0015
東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階

TEL 03-5360-1233
FAX 03-5360-1220

WEB <http://www.sva.or.jp>
E-Mail info@sva.or.jp

郵便振替 00150-9-61724

● 当会へのご寄付は、所得税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

「シャンティ」は、FSC森林認証紙（SGS-COC-1773）にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。

スタッフのひとこと 「私が好きな絵本」

■「おつきちゃんとかっぱ」 女の子が河童に連れられて川の底のお祭りを見に行く話です。娘もこの絵本が大好きで、小さい頃何度も一緒に読みました。河童のように川の中を自由に泳ぎまわっている気分になります。（河口尚子）

■谷川俊太郎の『ももこももこ』。海のしーんとした情景から、ももこによきぼろり。言葉は少ないながらもそこがまた子どもの感性を揺さぶるのでしょいか？人気の高い絵本の一つです。私もこの絵本の不思議な魅力にはまっています。（服部貴子）

■「猫は生きていく」 戦争中、縁の下に住みついた猫の一家とその家の家族が東京大空襲の中逃げまどい、最後に猫だけが生き延びるといふお話。お母さんが素手で地面を掘り、乳飲み子と子猫を炎から守ろうとするシーンは忘れられません。（大森篤史）

■編集後記 家で子どもとよく読む『こんとあき』『ピン・ボン・バス』。男の子なので乗り物の絵本が好きです。好きな絵本は読み終わってとたんに「もいつかい」、声色を変えて読むとケラケラ笑っています。きつとどこの国の子どもたちも同じように絵本を楽しんでいるのでしょうか。（村田泉）